

平成六年の『おくのほそ道』行脚

——伊達の大木戸から平泉まで——(一)

横 山 邦 治

○馬借りて桑折の駅に出づる。遙かなる行来をかかへて、かかる病おぼつかなしといへど、羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なん、これ天の命なりと、気力いささかとり直し、道縦横に踏んで、伊達の大木戸を越す。と、『おくのほそ道』に見える伊達の大木戸を起点として、阿武隈川沿いに陸前の国に至り、青葉城の仙台を経て松島の佳景に接し、石巻から北上川沿いに平泉に至るといふ平成六年の行脚を企画したのは、平成五年に福島駅頭で福島県の中通りを行く行脚が解散した時のことであった。そのことを駅頭で高橋由紀・牧野久恵の両OGに告げた時、老骨に鞭打つことを決心したのである。北上川沿いに登米を経て平泉に至るといふ旅程は年来の宿願であったので、早々と広告した次第であった。

芭蕉の『おくのほそ道』を追尋する旅なのであるが、平成六年には平成六年なりの諸条件あり、私自身にも私自身の諸事情があつて、オイソレと旅立つという具合にはいかないものである。まずは行脚の構成人員であるが、極めて多彩なる陣容となつていった。東海道の行脚の参加者であるOG群は子供連れを含めて九名ばかり、行脚計画を聞きつけて参加の同僚二名、文学部三年生の有志三名、二年生の有志五名、一年生のゼミ参加者一〇名という大部隊となつたのである。ゼミ参加者というのは、本学も大学設置基準の大綱化という指針のもとに教育課程の再編成をしたのであるが、その中で一般教育ゼミという科目があつて、専任の教員が新人の一年生を相手にゼミ活動をすることになつている。そのゼミ活動の中に『おくのほそ道』の研修旅行も組み込んだということ、一〇名の新人が参加したということになり、単位もある研修旅行というのは私の当初の自主的活動としての行脚という主意からは逸脱しているか

とも考えたのであるが、結果的には極めて積極的に活動してくれて、最初の東海道行脚の時に作成したレベルに近いパンフレットが完成、伊達の大木戸から平泉までの行脚が成功する予感がしたことである。

ところが旅準備としてのゼミ活動を始めた五月ごろだったか、十数年来の宿痾であるC型肝炎が活動期に入り、GOT・GPTの数値が高くなり始めていたので、インターフェロン注射を試してみようかと主治医に告げられたのである。丁度その頃に書道専修生の大連外国語学院との友好親善を含む中国金石研修旅行に同行する話も起きていて、中国旅行とおくのはそ道研修旅行を二つとも強行するのは体調から無理ではないかと思ひ悩み主治医に相談すると、その二つの旅行が終わったところで即入院とし、インターフェロン投与を始めようというのである。GOT・GPTの数値の高さが現況で果たしてどのような意味があるのか判らないままで、旅行終了後即入院という覚悟で、医師の言葉を信じて旅の準備を続けたことである。

この度のおくのはそ道行脚で一番心にかけてのは宿舎のこと、芭蕉様とて玉入に宿泊の時に「宿悪故、無理二名主人家人テ宿カル」ということをなされたのであるから、旅にとって宿舎は大切である。最近の学生諸君は、旅は業者まかせということが多く、平成五年の行脚の宿舎は全て業者まかせであったので、一流とまではいかなくても二流ど

ころのホテルばかりで、料金は一人前以上で近代的鳩の巢様の個室があてがわれるという次第にて、ハタゴにはめぐり会えなかったのである。二本松の大宗旅館がいくらかハタゴに近かったけれど。平成六年の行脚は前車の轍を踏むべからずと、当て推量で宿泊地の古そうな旅宿に電話をかけながらの予約、安い宿でないと面白くないので平泉は数年前に泊った記憶にある高館の山麓の民宿義経荘と決め、仙台と松島は宿が多過ぎて共済組合関連の宿とすると、後は未知にして何となしに人間味ありそうな宿ばかりかと電話の応待で思い込み、これも楽しみ也と同行の人と話しながらの旅立ちである。

平成六年八月二十六日(金)は早朝六時半に広島駅新幹線の集合、六時五十分発のひかり八二号で東京駅へ、すぐに乗りかえて東京駅十二時二八分発の東北新幹線やまびこ一二三号で白石蔵王に向かう。乗りかえ時間は四十分弱で大きいそがしである。名古屋で乗車してきたOGの高橋さんなどがいるので、改札口で集合して人数の点検していると、一人の学生が座席にハンドバックを忘れたと言って青くなっている。ハンドバックぐらいの忘れものならと思つてよく聞いてみると、旅の資金も全て入っているという。乗りかえ時間が少ないというので大急ぎで出て来た時の意識の空白が生んだミスで、大慌てで引き返し探したけれども清掃後でクリーン列車。プラットホームの車掌室に駆け

込んでも忘れ物の届けはないという。出発の時間は迫るの
で忘れ物の届けだけは提出してやまびこ一二三号に飛び乗
る。アキラメの境地である。ところが日本の国はアリガタ
イ国である。その夜、白石の宿にJRから連絡があつて、
清掃係の人が忘れ物のハンドバックを取得、虎の子の資金
ともども無事也とのこと、出鼻をくじかれた想いであつた
のが、一転して万々才である。猫糞という行為が当然考え
られたのであるが、日本という国の民度の高さの反映と申
すべきことであろう。自虐的にまで日本の政治的社会的未
熟を論ずる向きも多いのであるが、島国民族として国際的
視野の狭さと人慣れしない社交下手も指摘されるのではあ
るが、それは同時に他人の痛みの判らない身勝手ともなっ
て非難されるのであるが、治安のよさは矢張り世界に冠た
る事実であり、そこには江戸三百年の大平も十分に関与し
ていることとて、太平の世に長途の旅をした芭蕉の足跡を
辿るのも有意義也とこじつけることである。ともあれやま
びこ一二三号で蔵王白石下車、平成五年の『おくのほそ道』
行脚の始まりである。

二

白石市での宿は、白石農林年金会館本陣というのである。
“本陣”という尤もらしい名前に誘われて申し込んだ時に、

フロントの主任らしき人がマイクロバスで街道案内のサー
ビスもいたしますということでも二もなく予約、『おく
のほそ道』を辿ると言ったことへの反応がよかったので、
道案内として最適なと期待したのである。予約通り蔵王
白石の駅前に大型のマイクロバスが出迎えに来ていて、新
幹線の乗り継ぎで疲れ切っている身体を電話での口約束通
りに伊達の大木戸へ御案内と言われる。心準備もなくバス
の乗客となつて国道を一路南へ、福島県境を通り過ぎたと
ころあたりから左折して大木戸に向かう。運転手さんは自
信満々であつたが、伊達の大木戸というところは始めてら
しく、行けども行けども広い田畠の中を南下するだけ、厚
樫山（標高二八九米）を先端とする山塊が遠去かるだけで、
福島盆地の北端になる国見町の中に入り込んだのである。
道路脇の農協に立ち寄りJAの職員さんに伊達の大木戸と
いうのはどこかと尋ねると、ハテという顔。二三人で鳩首
協議の結果、も少し南下した田圃の中に何か遺跡がありま
すというので、田中の道を辿って行くと、阿津賀志山防塁
の遺跡という立札がある。単なる盛土の跡であるが、引き
返して国見峠と言われたらしい厚樫山麓の国道から遠望す
ると、平泉の藤原氏が鎌倉の頼朝軍を防ぐための土塁の規
模が相当なものであったことが判る。所々に空堀の跡らし
い窪みやら沼があつて土塁も点在する。松の叢も残る。長
大な防護柵らしきが厚樫山麓から遙か阿武隈川まで造営さ

れていたらしい。確かにここは厚樫山と阿武隈川との間が一段と狭くなっていて、防置を築くには最適のところであるようである。鎌倉軍には簡単に打ち破られたようではあるが。ところで芭蕉が『おくのほそ道』で思い入れたっぷりに述べている『伊達の大木戸』は、角川文庫本の注のようにこの防護柵跡を指すのであろうか。だとすれば『越す』という極めて具象的場所を越えることを示すとき表現から見ると、ひどく漠然と掴みどころのない場を指すがごとくに思える。曾良の随行日記では今少し具体的に記述してある。『桑折とかいたの間二（国見峠ト云山有。）伊達ノ大木戸ノ場所。一略一左ノ方、石ヲ重而有。大仏石ト云由。』とあるのである。大仏石というのは、貝田を越えて越河にあるというが、運転手さんに改めて探してもらおうのが気の毒で中止、随行日記に『福島領ト（今ハ桑折ノ北ハ御代官所也）仙台領トノ塚有。』とあるあたりかと、貝田の宿場的雰囲気のある脇道に入っていくと、墓石らしきが門前にゴロゴロと転がっている小さな寺院があって、昔の代官所跡らしいと皆んなが話し合っている。そのあたりをウロウロしていると野中に細い畦道があって、何となく昔の街道らしいと言うので歩き始める。バスには先行してもらって、ほぼJR東北本線沿いにある野道を貝田駅まで歩くこととする、街道としては周囲の田畠に蚕食されて狭くなっている感じであるが、厚樫山麓をめぐるながら阿武

隈川を遠望する街道らしきは満喫できる、ここらあたりからは夕景迫ってきて、心あわただしく貝田駅前からバスに飛び乗る。

このあたり、桃隣の『陸奥衛』（元禄九年旅）には、

○是より藤田村へかかり、町を出離て左の方へ二丁入、義経腰掛松有。枝葉八方に垂、枝の半は地につき、本来は空に延て、十間四方にそびへ、莓こけの重り千歳の粧ひ、暫木陰に時をうつしぬ

辛崎と曾根とはいかに松の蟬

経塚山此所なり。又海道へ出るに、国見山高くさゝえ、伊達の大木戸構きびしく見ゆ。

とあり、水尺編『国曲集』（正徳四年刊）には、

○伊達の大木戸を見るに、左は雲に続たる層巒爰にせまり、右の田の面広ふして一段ひきく、すハと云ハハ遙の山際迄大隈川せき入て、たちまちの湖水になさん、日本一の要害、人力の及ぶまじき所

大木戸を入や子鷹の身のほそり 露川

とあり、北華の『蝶の遊』（元文三年刊）には一層くわしく

○藤田、貝田の駅過て、道の左の岡の上に、弁慶が硯にせし石と云うあり。大なる石の上、少し硯の様に窪みて有り、炎天にも水へらずという、いかが。夫より暫く行き、左の方山畑の中に高さ九尺ばかり、枝四方へ蔓るこ

と二十間余ありて、いと珍しき松あり、是を義経の腰掛松という。木の下に義経の小社あり。それより伊達の大木戸の跡を見る。左の方は国見峠とて山なり。右は地さがりて田畑打続き、阿武隈川の際に到る。今も猶お木戸の跡、二重なる空堀なり。左の山上より掘り続けて、十二里（六丁を以て一里とす）の間という。紛うべきもなき要害なり。古の下紐の関なりとぞ。

と見える。福島県と宮城県の県境の国見町には大木戸という大字もあり、厚樫山から阿武隈川の間を急造された空堀と土畳を伊達の大木戸というのであろう、とすれば芭蕉は国見峠（今は厚樫山麓をめぐる国道で、一寸した坂道という感じである。）を越えることで、伊達の大木戸也と六法を踏んだのである。そして伊達の大木戸の由来を知っていたとすれば、飯坂の医王寺から更に義経伝説の世界に入っていくことを実感したかも知れない。私どもは硯石も腰掛松も確かめることなく、越河から斎川に向かう。

できるだけ残存している旧道を通って欲しいと頼んだのであるが、夕闇迫るしなかなかそういう道はなく、貝田から斎川までは新造の国道一直線、山際の一本道である。斎川の手前の馬牛沼というところから右手の道に入ると旧道で、両側の山が迫った道を抜けて斎川の甲冑堂に至る。夕陽に照らされた甲冑堂はよく整備されていて、小さな堂内に佐藤継信・忠信兄弟の嫁の像が二体安置されている、由

来は色々書かれているが、ともかく美しく彩色された像は、明治八年焼失後の今出来のもので曾良の随行日記に書かれたものではないそうである。境内に小さな展示館あり、堂守（というより一般の民家の庭先に小堂が建っているという感じで、片手間の堂守か）の方に時間外なのに頼んで内部に入れてもらう、そこには佐藤兄弟の嫁云々の展示品はほとんどなくて、遺存するものもないのもあるうが、孫太郎虫の由来書やら標本やらばかりが展示されている。孫太郎虫は、小児の疳（これも何やらよく判らない病気で、辞書的には「漢方医学の病名。一略一五疳の総称」へ日本国語大辞典）子供の病気で、脾疳やひきつけなどを指す。”などあるが、疳の虫を切るなど申す民間治療もあって、子供が神経症におそわれるとその治療を強制された。私自信はその治療を受けたことはなかったが、次弟が受けたことがあり、相当な荒治療らしかった。あれは何だったのだろうと今も不思議に思うことである。）の妙薬として戦前までは評判の高かった薬虫で、旗指物を荷った行商の人を見た記憶もあるが、この甲冑堂の側を流れる斎川（白石市の北端で白石川に合流する、白石川はやがて阿武隈川河口に近い柴田町あたりで阿武隈川に合流する。）の清流で採れるという。この甲冑堂は孫太郎虫行商の守護神もしくは勧進元に任じているらしい、『蝶の遊』にも見えるので江戸期から知られていたらしいが盛んに行われたのは明治・大正のころのようで、

現在はまたかつてのように賸ものが出るほどの盛況は見られないが、今も実物を売っている専門店があるという、このお堂の近くの町尻南という字にある保科商店である。少し買いついで夕食の興にと提供したが、分類学上は脉翅目のヘビトンボ科に属する昆虫の一種の幼虫で、一見してブヨブヨした百足の小型、食欲をそそるには遠い代ものである。興に乗って食した人もいるけれど、案外美味也と口では申しながら、あまり快適な顔付をしている人はいなかった。私はイカモノ喰いは敬遠である。

甲冑堂から旧道の坂道を少し引き返すと、『おくのほそ道』に「鑿摺、白石の城を過て」と記し、随行日記に「アフミコフシト云岩有。」（角川文庫本注・「アフスリ」を改める。「コフシ」とは「コワシ」の誤記。鑿毀。）と記す場所に出る。聞老志には「破鑿坂齋川以西羊腸、維石巖々嚼足、毀蹄一高坂也。是以馬憂、虺隤、人痛嶮難。王勃所謂関難踰者、於是乎可信矣。仍土人称破鑿坂」と大仰であるが、高陽の『奥游日録』（明和九旅）にも「鑿摺石と云所有。少の間道險危巖疊りて馬通がたし」とあるので、相当な険路ではあったのであろう。東側の小高い丘の斜面に石が少々重なり合っているが、坂は切り開かれていて通り易い小坂になっており、斜面の石に腰掛けて記念写真を撮るといふ具合で、馬が通り難いという有様は想像しがたい、何時ごろ開削されたのであろうか、伝誦の地保

存よりは便利優先の世の中であるから当然のことであるだろう。

バスは夕暮れに本陣へ到着、JA団体さん向きの和洋折衷のホテル的旅館で、本陣という名前から城下町の中心に立地している芭蕉宿泊の場にも近いかと期待もしていたのに反して、城下よりは白石川の遙か上流に位置して、町中探検は不可のところである。ここは湯にでもつかること専一也と露天風呂に入ると、白石川の清流が目洗う。NHKの大河ドラマ「縦の木は残った」のロケ地で、「日本百景」と言われる岩はだの美しい蛇淵（パンフのPR的文章）と言われる蛇行した淵瀬が目前である。遠くに南蔵王が美しい、平成五年の旅は山と川に恵まれた第一夜である。

三

八月二十七日（土）快晴、今日も本陣のマイクロバスで白石から名取まで送っていただく約束、芭蕉は白石の城下町を素通りして竹駒神社に直行しているようであるが、一応白石市の名所案内。白石城の歴史は古いようであるが、江戸期は伊達家の宿老片倉小十郎景綱の子孫が一万八千石を領して在城、幕末まで十代続いたようである。白石城は明治七年に解体してしまい、現在は益岡公園になっていて昔日の悌はないとのことで、片倉家の廟所が本陣の近くに

あるというので案内される。小さな山の中腹に墓所がある
のであるが、大名墓というのではなくて、一つ一つの墓が
石造の仏像であるのが珍しい。十一基の仏像が一行に並ん
でいて、そのそれぞれの仏像の顔形に微妙な違いがあって
面白く、墓所特有の森厳という雰囲気とは異なる明るい空
気を感じる。

成辰戦争の時の官軍方の悪役であった世良修蔵の墓と松
窓正二の句碑のある陣場山に登り、白石川の向こうに白石
城跡を望む。関が原の戦いの時に伊達政宗は白石城を攻略
したのであるが、その時本陣を置いたのがこの場所と言わ
れるだけあって、白石の城跡が手に取るように眺望できる。

ここで遠望すれば、城方の動静は盤上の石のごとくによく
見えたことであつたらう。こういう場所に悪役で悲惨な最
後を遂げた修蔵の墓と清冽な俳人乙二の句碑が同居してい
るのも妙なものである。次は孝子堂ということで、白石川
を渡って移動、田舎道の側にある小堂に案内される。白石
城下六本松河原での姉妹の仇討として著名な宮城野信夫の
霊を祀ったところで、大正十五年の建立という。この仇討
話の実説は、享保八年四月のことというから芭蕉たちは知
るはずもないのであるが、歌舞伎で採り上げられ『若太平
記白石噺』安永九年四月江戸薩摩屋小平太座上演で劇化、
やがて劇化された話が実録『慶安太平記』に転化して、宮
城野信夫の仇討は『慶安太平記』即ち由井正雪の慶安事件

の挿話となつてしまい、必然的にこの仇討は寛永十七年
の出来事ということとなつてしまふ。今では地元の説明板
などにもこの誤謬がそのまま実談として説かれることがあ
るようである。寛永年間ということであれば、百姓の姉妹
が苦心の末に仇討をするという話題性に富んだ話であるか
ら、芭蕉たちも何らかの反応を示したかも知れないが、歌
枕を尋ね義経伝説に興を示しする芭蕉がかくのごとき俗事
を採り上げることもなかつたであらうが、とにかくいまだ
生起していない事実なのであるから興の示しようもなかつ
たのである。

可能なかぎり旧道を通つていただくようお願いするが、
陣場で白石川を北に渡ると、白石川に沿った国道が大河原
町まで続く、対岸に東北本線が走っているが、車の通れる
道路はなさそうである。旧道は白石川南岸にあるのが自然
のような気もするが、山魂が迫つていて難路であつたかも
知れない。大河原町の外れで再び白石川を渡り、南岸を阿
武隈川との合流点まで旧道と重なる国道が延びる。途中の
右手の丘に原田甲斐が一時在城した船岡城跡が見える。鬱
蒼とした森林となつている小高い丘で船岡城址公園となつ
ているが、そこに立ち寄るということもなく阿武隈川との
合流点で対岸に渡る、柴田町というらしいがここから岩沼
市まで阿武隈川に沿って東に向かう、長大な土堤の続く玉
崎というところから旧道に入つていただき、途中下車。雄

大な阿武隈川の河口の景を遠望する。深いあざやかな青緑色の大河が音もなく太平洋岸に向かって曲流していく、対岸のなだらかな山肌も濃緑に輝いて水際を縁取っている。白河で見た阿武隈川の清流に沿って北上した芭蕉たちも、この河口に至って感慨があったに違いないと思うことである。ここに至るまでに何度阿武隈を渡河したことであろう、その度に旅の困難を思いながら、同時に自然の美しさにも酔ったに違いない、阿武隈川は悠然と美しいのである。芭蕉に阿武隈を詠じた著名な句はない、最上川に至って名句が噴出する、その噴出していく深層心理として阿武隈が、そしてやがて石巻から平泉まで辿る北上の流れがあったと考えるのもいいのかも知れないのである。そんなことも妄想するほどに阿武隈河口の景は、私を圧倒していた。

岩沼の街に入って旧道をくねくねと北上する、両側の家並に昔の悌がそのままとは思えないが、重厚な土蔵造りの家が並ぶ町は、宿場町として栄えていた風情を残している、その町のだ真中に竹駒神社はある。『おくのほそ道』には、**鑑摺、白石を過ぎて笠島の郡に入り、藤中將実方の塚と道祖神を尋ねようとして五月雨のぬかり道に難渋して寄らなかつた**と記し、**岩沼に宿る**とす。これは随行日記によっても判ることであるが、地理的に見ても前後錯覚があることは判っていた。私どもは地理的順序に従って『おくのほそ道』を辿るのである、岩沼に宿るとあるけれども芭

蕉たちは仙台まで直行している。岩沼が宿場町として印象的であった故に芭蕉は「宿」と記したのであるが、この宿場の一般的には目玉商品である竹駒神社に参詣しながら触れていない。随行日記には「岩沼入口ノ左ノ方ニ、竹駒明神ト云有リ。」とあって更に「ソノ別当ノ寺ノ後ニ武隈ノ松有。竹がきヲシテ有。ソノ辺、侍やしき也。古市源七殿住所也。」と記すが、芭蕉は武隈の松について歌枕的談話として著名であるだけに饒舌に記すのである。芭蕉の歌枕に対する執着は激しいと言わざるを得ない。

パンフにも鳥居前の石柱にも竹駒稲荷神社は日本三稲荷の一つとある。日本三稲荷と自称するのは中国地方だけでも三つぐらいはありそうで、そのあたりの事情に暗いけれども、岩沼の竹駒明神が古い祠であることは言うまでもない。境内に東龍齋謙阿という芭蕉翁六世を自称する人の句碑と並立する「さくらより松は二本を三月越し」の句碑があり、その句碑の側面に、「当社より二本の松へ二丁余」と見える。平成二年に過激派の焼打ちで全焼した本殿が華麗に再建（焼失以前の社殿は桃山建築の遺風を感じさせられる立派なものであったようである。）されているのを見ながら、二本の松に向かう。五分も歩けば二本の松、一寸した小憩のできる公園の前に根本から二本に分かれた大きな赤松が植えてある。自然木ではない、文久二年に倒木したのを植え継いだ七代目の松と伝えられているが、高砂の

松など長寿の徴として唱い納められる松の寿命は、案外短いものようである。今仰き見ている人生五十年の人の生に比すれば永いことで、この二本の松も明治維新から昭和の大変まで眺めてきたのである。理も非もない平成二年の過激派の竹駒神社の焼打騒動では煙にむせながら呆れ果てたことであろう。

隨行日記によれば、竹駒神社參詣後に二本の松を見てから「名取郡之内」として笠嶋と名取川、若林川の説明があつて、殊に笠嶋は「行過テ不見。」として「夕方仙台ニ着。其夜宿、国分町大崎庄左衛門。」とある、この四日は「雨少止」とあるから、『おくのほそ道』の「このごろの五月雨に道いとあしく」という状況であつたかどうかは判らない。「左ノ方一里斗有り。」というのが主因であつたかも知れない、「身疲れはべれば」というのは本当であつたであろうから。平成の私どもは借切りのバスで岩沼駅前道の道を左折して遠くに低く連なる山並の望める道に入っていく。田畠の広がる田舎道で農家らしきが点在するが、その道を大きく右に迂回しながら岩沼から北西方向に進む。相当な距離（隨行日記に「左ノ方一里斗」という距離である）が、それ以上に感じられる道のりである。を走って左折、バスを降りてダラダラ坂を歩いていくと道祖神の社である。藤中將実方が馬上で通過しようとして神罰により落馬、そして落命したと伝える（『源平盛衰記』卷七「笠嶋道神事」

の条参照）祠である。私どもは裏手から境内に入ったらしく、あまり広くない境内を社殿の正面に廻ると左程高い石段があつて鳥居が下の方に見える、こんもりとした丘上の森の中にある祠なのである。山麓というのではない、鳥居前の細い道が実方の落馬した昔日の街道なのであろうか。社殿は村社並みの建物であるが古色を帯びてはいない、屋根を瓦葺きにしたのが近時のことらしく、一人前の社にはなつたのであろうが古色を消してしまつたのであろう。森閑として人っ子一人居ない域内に、昔日の悌を追うのは詮ないことでもあるだろう、「笠嶋はいづこ」と追慕した芭蕉の脳裏に明滅したであろう姿も勿論のことないようである。

道祖神の社を後にしてしばらく名取川寄りの北方にだら坂を下つたところ、名取市愛島塩手字北野三十九の地に藤中將実方の墓と称する塚がある。小さな人家が点在し説明用の標柱の建つところを左折して底浅い溝川を渡りこもりした杉林の中に入ると、一部分が空閑地のように整理されており、その中に玉垣に囲まれた塚というか墓域というか墳墓があつて、西行の「朽もせぬ」の歌を刻したものである。墓域を管理清掃する人はいるのだろうか、多くの人が訪れるというところでもなさそうである。そういうところを訪れ得なかつたことを悔いる芭蕉の想いは、歌枕に執するあまりのことであつて、そこに

芭蕉の特異な詩想があると言えるのであろう。

バスはJRの名取駅まで私どもを送って下さる、本陣フロントの善意である。芭蕉が名取川を渡って仙台に入るという名取川、随行日記では「○名取川、中田出口二有。大橋・小橋二つ有。左ヨリ右へ流也。」とあり、更に「○若林川、長町ノ出口也。此川一ツ隔テ仙台町入口也。」と見える若林川（今の広瀬川であるが、名取大橋の二キロメートルばかり下流で合体する。）は、JRの列車内で一瞥あるのみ、阿武隈川を見た直後の目にとっては小さな川と写る。川幅は相当に広いのであるが、水量が少ないのである。大橋（名取橋）も小橋（大野田橋）も右手に見えるはずであるが、不注意のまま見過ごす、今はもちろん昔日の木橋ではなくなっているはずである。仙台駅から錦町のKKR仙台、今夜の宿で国家公務員の宿泊施設を利用するのであるが、さすが都会のドまん中であるにもかかわらず土地たっぷりで閑静な宿泊所である。夕景まではゆっくり時間があるので芭蕉主従の行動に拠りながらの市内散策であるけれど、KKRに本陣並みのサービスを依頼することも出来ず、私どもの脚力の限界もあってタクシー行脚に一決、仙台市の樹木豊かなメインストリートである東二番丁通りの西側に当たるところからというので、青葉区霊屋下の広瀬川を渡って経ヶ峯と呼ばれる小山にある伊達家三代霊廟拝観から始める。この霊廟には芭蕉は参詣していないが、また昭

和二十年七月十日の仙台空襲の戦災で焼失したものではあるが、往古の悌を忠実に再現しているという姿を見るのも、江戸初期の装飾過多ながら絢爛たる建築美を今に体験できるかと期待しての拝観である。伊達家創設の初代政宗公の霊廟瑞鳳殿は、独眼竜政宗が寛永十三年に死亡しているから、芭蕉訪仙当時は華麗に存在していたはずであるが、彼にとって日光の東照宮ほどの興味を抱かせなかったであろう。黒漆色を基調として金象嵌した霊屋は荘重な感じを与える建物で、昭和五十四年再建であるから創建当時のきらびやかさを今に見せるのであろう。日光東照宮を見た目には、小じんまりと謙虚に鎮まった感じであるが、周囲の繁茂した樹木の緑と調和して映えている。二代藩主忠宗公霊廟の感仙殿と三代藩主綱宗公霊廟の善応殿が参道をはさんで瑞鳳殿と対峙する場所に並置する、昭和六十年の再建というが、伊達藩の学芸の悌を今に生かしていると言えよう、観光政策として、成功しているのか参詣の人は群をなしている。

地図を見ると経ヶ峯の麓から曲流する広瀬川の上流に当たるところに青葉城址がある、タクシーで向かうと大きく道を迂回してくねくねと城址に至る。青葉城内の古い建築物は遺っていないくて、石垣などの遺構が遺存するだけであるが、城内の中央にケバケバしい観光物産店が我が物顔に出店していて、何とも興醒めなことである。仙台市の全貌

が大観できる本丸跡で、美しい緑深い街並を眺望することに専念して、背後の構内は見ないことにする。数年前に訪れた時にはこれほど売らん哉の姿勢は見られなかったのになと思うことである。地域振興という目標達成のために観光化する文化遺跡が多いのであり、それが今様の観光化政策なのであるが、汚職狂いの指導者のもとで一手指針に狂いが生ずるとこの様な有様になってしまうのである。

私自身の気持ちとしてはソソクサといった気持ちで青葉城址を後にして、亀岡八幡神社に向かう。随行日記に「一六日 天気能^た。亀が岡八幡へ詣。城ノ追手入。俄二雨降ル。茶室へ入、止テ帰ル。」と見える神社である。芭蕉たちも「城ノ追手入」というのであるから、青葉城の囲みをぐるりと廻って裏手に出て神社に至っている、今は東北大学の中を通過して川内亀岡町に行く。石の大鳥居の下まできて、今ごろ亀岡八幡に参る人はありませんよとタクシーの運転手さんが笑っている。石段の下から上を見上げても頂上がどこか判らない、石段は何段あるのかと聞くと三百段あまりあるという。これは大変でタクシーの運転手さんの笑いの意味が判る、旧い社殿は伊達家霊廟と一緒に昭和二十年の空襲で全焼して旧姿を止めず、今どきこんな急坂を登る物好きはいないということなのである。しかし芭蕉様の登られた石段である、ここで引き下ったのでは故券にかかわるわけで、大変立派な石組みである石段を登

り始める。伊達家の崇拝厚く四代綱村が元寺小路の北の岡にあったのを天和三年に遷座して、氏神の鎮座地として相應なこの亀岡をトして壮大な社殿を造営したというが、さすがに大変な石段である。中段に一寸した広場があって休憩の場としてふさわしいが、元来は隨身門と長床が配置されていたところという、明治初年に取りこぼたれてしまつてそのまま広場となっているらしいが、急坂で息のはずむ身体には丁度いい休息を与えてくれる。それからがまた急坂、今度は石段の終点が何となく望まれるので、喘ぎながら一歩一歩と登っていかざるを得ない。登り切ると急に視界が広がる、青葉城の上からの眺望から言えば視点がやや高く視野が北の方数十度振られる感じで、遠く塩釜や松島方面も眺望がきくということであるが、今日の夕景は少し遠くがもやっているようである。広瀬川から仙台市の北半分は眼下である、雄大な眺望と言える、仙台藩の穀倉地帯が一望できるという感じである。社殿は戦災後再興された粗末なもので、旧社殿と三間三面、入母屋式素木造りの簡素な拝殿と、同じく三間三面、切妻式流れ造り総朱塗りの本殿が、石敷の合の間で連結し、杈現造りのすぐれた建物(『仙台の散策』宝文堂刊)というものではない、瑞鳳殿のごとき再建の話もないようである。車道でも付けければ参詣者も増加するかも知れないが、粗末な社殿であっても今のままで観光化しない方が昔を偲ぶにはよいのかも知れ

ない、眺望だけでも登坂の苦勞を水に流して値千金である。結果的には広瀬川兩岸の名所旧蹟探訪となる。

夕刻、夜の仙台市探訪と洒落込んだが、繁華街とされるあたりもネオンがけばけばしくなく、静かな杜の都である。

四

八月二十八日(日)、快晴、広瀬川の東側もタクシー乗り継ぎで探訪、まず八幡さんでも亀岡でなく大崎の八幡さんで、亀岡から言えば広瀬川を牛越橋で渡って対岸に当たる恵沢山上にある、石段は九十四段あるというが裏から車で登ることが出来る。『仙台総鎮守 国宝建築 大崎八幡神社』とタイトルにあるパンフに「社伝に依れば、坂上田村磨(マ)將軍が東夷征伐の折、現在の岩手県水沢市に胆沢城を築いて奉祭し、降て宮城県北部五郡を領した大崎氏が遠田郡田尻の地に水沢より遷祀し代々崇敬したので大崎八幡神社と称される様になった。十三代義隆公の世に至り一揆が起こり、伊達政宗公、大崎氏を追討し玉造郡岩出山の地に城を構えその城中に遠田郡より奉遷し、尊崇おこたり無かったが、慶長六年仙台上に青葉城を築くや、同九年秋工事を起し、三ヶ年を要し慶長十二年八月十二日に遷座祭が行われた。」とある、派手好みと思われる伊達政宗の社殿が修復されながら今日に伝わっているのである。黒漆塗

りの地色にきらびやかな金色の彩りが浮かび上がって華麗な社殿である、権現造りという様式だそうであるけれど、桃山期の豪華壯麗な建築文化が奥羽の地に厳存するのである。亀岡の八幡も似たようなものであったろうから、この大崎八幡を訪れなかったらしい芭蕉も、仙台で今様の文化を亀岡八幡で体験したに違いなかった。奥羽の果てとて文化的に鄙の地というのではなかったのである。

隨行日記に依れば七日の日に北野屋加衛門の案内で「権現宮を拝、玉田・横野を見、つゝぢが岡、天神へ詣、木の下へ行。薬師堂、古へ国分尼寺ノ跡也。」と経めぐっている。権現宮というのは東照宮のこと、伊達藩は政宗没後財政難に陥り幕府に財政援助をしてもらってその危機を脱したというが、それに対する感謝のしるしとして東照宮建立許可を得た二代忠宗公は、天正十八年東北地方に進駐した関白秀次に従った徳川家康が宿陣したと伝えられる天神社の場を卜して、五年の歳月を費やして承応三年に現存する東照宮を建立したという。その建築群は壯麗を極めており、「仙台における江戸初期建築様式の典型的で精巧堅実な秀作を生み出す」(『仙台の散策』宝文堂)というものになっているようである。幕初における徳川幕府と伊達藩との関係は極めて良好のようで、元禄期においても芭蕉隱密説が出るほどの險悪な関係があったとも思えないけれど、外様大名の雄として幕府に対する忠誠心は十二分に示す必要も

あり、東照宮造営のことは極めて大切なことであつたらうから、伊達家の総力を尽くしての建築ということであつたに違ひなく、芭蕉参詣当時のきらびやかさを思うことである。JR仙台線の東照宮駅の近くのお宮の鳥居（備前の国の犬島産の花崗岩で作られた明神鳥居）『宮城県文化財』宮城県文化財保護協会）前から石段あたりまで古道具市が開かれていて、ガラクタ家具から骨董的な道具まで路上陳列である。日曜市の慣行があるのかも知れないが、行脚部隊も思わず足を止めることである。素人目にも古色に秀れた面白い掘り出し物がありそうであるけれど、旅先とて買ひ込んでいくことは不可能である、素見^{ヒヤカシ}ということになつて何とも残念なことである。

東照宮は透塀越しに本殿を拝するということで、修復中の部分もあつたのであろうが、隔靴搔痒の感が残つたことである。全体的に黒漆塗りの地色に金と朱の色が浮き上がつていて、きらびやかではあるけれどもしっとり落ち着いた感じの建物である。日光の東照宮の華麗さのみが目立つ建築群とは異質な文化の味を感じさせる建築群と言えるのではあるまいか、日光の東照宮も拝した芭蕉の感想を聞いてみたいものと思うことである。ところが『おくのほそ道』には権現について一言も触れられていない、東照宮建立のために移動させられたらしい天神社については、『薬師堂・天神の御社など拝みて、その日は暮れぬ。』と触れ

ているのである。

次はその榴岡天満宮参拝、JR仙石線の榴岡駅の近くで東照宮から言えば南の方に数キロのところ、名勝榴ヶ岡を公園化した西の方にある天神社は、『榴岡天満宮縁起』というパンフに『躑躅岡天満宮はもと柴田郡川内にあつた。（今もある）藤原基衡の家臣で佐藤小太郎基春が国分荘の領主になつた時小俵（小田原）玉手崎（東照宮の地）に勸請一略一慶安三年（一六五〇）東照宮の創建と共に東隣地に移動し寛文七年（一六六七）七月二十五日遺志管公（学問の神）として管公の真筆が奉納され天満天神としてこの地に遷宮一略』と記されている。社殿は寛政七年に焼失してからはあまり目覚ましい建築もなかつたようである、文化財的建築物は見当たらないけれど、境内にはパンフにあるだけでも二十一基の句碑や歌碑が並んでいる、さすが学問の神様の境内だけのことはあるのである。それらの立碑の中で最も古いのは大淀三千風追善の享保八年建立のものであるから、芭蕉訪問時の面影を残すものとしては周辺の地形と遠望できる山並だけと言えるのであろう。町中なのに人影少なく薄汚れた印象を残す境内は、少し興醒めではある。

木の下薬師堂というのは、天神社の南西一キロあまり、聖和学園という短大も付設された学園を経営している陸奥国分寺（真言宗）の境内である。聖武天皇勅願の国分寺と

国分尼寺は陸奥国の宮城野に建立されたのであるが、発掘調査の結果方八〇〇尺という築地に囲まれた七堂伽藍で推定六十米の七重の塔もあったという、勿論永い歴史の中で全て烏有に帰していたが、伊達政宗が青葉城に居を移した慶長八年から復興を計画、慶長十二年十月に国分寺講堂跡に桃山様式の本瓦葺の仙台最古の建造物とされる薬師堂を再建、南大門の位置には茅葺屋根の仁王門が建てられている。七重の塔の礎石なども昔日の姿を偲ばせるごとくに残っているし、緑深い巨木に囲まれた遺跡で芭蕉は懐旧の情にかられたと思われる。薬師堂も虚偽威しのきらびやかこそないが、単層入母屋造りのゆったりした姿を保っている。印象深い建物として記憶されたであろう。単層入母屋造りで間口三間奥行二間の茅葺の仁王門は、単純素朴な造型美を保っていて印象深い、仁王様の前の扉には沢山の大小のわらじが奉納されてぶら下げである。素朴な信仰心が今も生きていたのである。紺の染緒付けたる草鞋二足の一足ぐらひは、芭蕉も旅路の前途の平安を祈って奉納したい気持ちを持ったかも知れないと思うことである。準胝観音堂から宝物館まで経廻って、さて奥の細道である。

“奥の細道”と呼ばれる道は、仙台から多賀城に向かう古街道と言われている。その古街道の認識は、芭蕉主従において『名勝備忘録』の十府浦の鱸紙に見える、今市ヲ北へ出ヌケ、大土橋有。北ノツメヨリ六七丁西へ行所ノ谷

間百姓やしきノ内也。岩切新田ト云。カコヒ垣シテ有。今も國主へ十符ノコモアミテ貢ス。道田ノ畔也。奥ノ細道ト云。田ノキワニスゲ植テ有。貢ニ不足スル故、近年植ル也。是ニモカコヒ有故、是ヲ旧跡ト見テ歸者多シ。仙台ハ貳里有。塩ガマ・松嶋ヘノ道也。”というものである。仙台市北郊に今も今市という集落があり、その集落を突き抜けて七北田川に架かる今市橋を渡ると本松山東光寺門前である、相当に大きなお寺であるが赤瓦の今様の寺院で古格は見られない。この門前から塩釜街道が続くのであるが、それが古くに奥の細道と呼ばれた道なのであるか。とにかくここからはしばらく七北田川沿いに歩き始めて、多賀城の壺碑の在所に向かう、タクシー利用ばかりでは芭蕉様に申し訳が立つまいというわけである。自動車もトラックを始めとして沢山往来して今様の道になっているが、道筋に点在する家並は古格を存するものが多いようである。古い街道筋なのである。猛暑と申してよろしい直射日光にジリジリ照らされての行脚は、汗が吹き出て相当骨身にこたえることである、手荷物はタクシーで宿まで先行させているにもかかわらずである。JR東北本線の岩切駅過ぎのガード下をくぐって宮城野の田園地帯を西から東に進む、松林を遠くに望みながら歩を早めて林の中に入ると、右手の少し小高いところに壺碑を収蔵した小さな祠のような覆堂が見える。水戸光圀の依頼で伊達綱村が建てたと伝えられるもの

で、その覆堂の周辺は公園のように整備されていて腰をおろして一休みするには好適である、周辺の整備が年ごとに手を加えられて公園化しているように感じられる。格子戸越しに石碑の文字をひろい読みするが、薄暗くて真昼でも十分に読み解きかねる。『おくのほそ道』に少々の誤記あるは当然のことと言えようか。ともあれ天平宝字六年という年次が刻されている石碑を見れば、往古の歴史を想い芭蕉ならずとも感慨深いものがある、*“ 泪も落るばかり也 ”* というのは文飾としてもである。涙こそ落さなかつたけれど、私どもは汗を十分に落して休憩、近くに発掘調査が終って整備完了の多賀城跡探訪は一寸中止で東北歴史資料館に向かって歩き始める。資料館は*“ 多賀城外郭南東端 ”* に位置しているようで、発掘調査跡らしい広場の端に建っている。古代の東北の歴史が地下から出てきたのであり、芭蕉が泪を落した以上の感動が私どもを襲っていいのであるが、無機質に展示されているものを見ただけでは、芭蕉的感慨とは無縁の衆生となり果てる、野田の玉川はいずこと再び歩き始めることである。

野田の玉川は日本六玉川の一つとして歌枕として著名だが、江戸期から *“ 為^{リテ}瘵^シ地^ニ而^シ、唯^ス遺^ス野田之溝梁^ニ耳 ”* (『奥羽観蹟聞老志』) というのであり、今は *“ コンクリート護岸の溝 ”* (『奥の細道』を歩く事典) となり果てているというが、末松山宝国寺への通り路らしいというので歩

き始めたわけである、*“ 多賀城碑の東方、徒歩で二十分余りの所 ”* (事典) というので安心していたのであるが、東北本線のガード下をくぐって舗装されたクネクネ道を歩いている間に何が何だか判らなくなる。あたりの人に聞いてもよく判らない、とにかく八幡にある末松山に向かって歩くという目的に従っているうちに、*“ 野田の玉川 ”* の標識のある近代の護岸構築された溝川の通りになる、コンクリの溝に古態を残すべくあれこれと工夫はしてあるが、ともあれ名みの野田のコンクリ溝である。現在の建設行政では人工のコンクリ造築でないと工事ではないことになっているらしく、自然の破壊は無限定である。古代遺跡の発掘調査と自然破壊とが同じところに同居しているのが面白いと言えは言える。コンクリに断裂が生じて崩落が始まると何とも始末の悪いものになるのであるが、次世代の日本人は昭和世代の官僚行政の悪しき遺産に泣かされるのである。樹木が育つと根が張って、コンクリ擁壁は簡単に崩落するのですから。現に名も知らない雑草がコンクリ壁の隙間から芽を出していました、自然の復元力をたたえるべきか呪うべきかであります。

芭蕉が *“ それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て末松山といふ。 ”* と記しているところ、随行日記には *“ 末の尅、塩竈に着、湯漬など喰。末の松山・興井・野田玉川・おもはくの橋・浮島等ヲ見廻リ帰。 ”* とあり、

午後二時過ぎから三・四時間の間にこれだけのものを見学して廻っていることとなる、相当の脚力というのが実感である。私自身は朝からの強行軍でへばってしまい、末松山のある八幡まではとタクシーを拾うこととする、若い娘子軍は勇氣凜凜徒歩行脚である。

仙石線の踏切を渡って左側の小路に入ると、下町の町並の中に末松山宝国寺という禅寺があり、その裏手の墓地の中に末の松山の連理の松はある。町中の墓地であるから「墓原」という感じではなく、下町の庶民の墓のある松林に二本の巨松があるというところ、数本の若松がやがて二本の古松に取って替わるのであろう。恋と無常とが並存する『おくのほそ道』の行文から受ける感銘と、現在の古松の姿から私どもが受ける感じとは落差があるようである、寺の近くのスーパーでアイスクリームを買い込んで渴を医している私どもには、恋も無常もないのであろう。宝国寺裏から民家の間の小路を数分歩いて沖の石の在所、これも民家の間の小さな池の中に沖の石と称する黒灰色の怪石がある。観聞志に「八幡農家中、有小池、池中奇石礫々、佳状可愛、州人古来称曰興石、奇絶如盆池、池中乾隅有水脈而出、是乃興井也」とあるごとし、民家の間の屋敷地にヒョッコリ三間四方もある巨岩が露頭しているのだから、奇と言えば奇であり、怪と言えば怪であるが、さて歌枕と言っておりがたがるほどのものかどうかと俗人は思うこと

である。世の歌枕は一般にかくのごとしであるが、歌枕を追尋する芭蕉にはまた別の感慨があったのであろう。

JR仙石線多賀城駅から本塩釜駅、駅前からテクテクと参道の石段方まで歩くと相当の距離である。裏参道を車で行けば簡単なのであるが、芭蕉たちは「石の階九仞に重なり」という石段を登ったに違いないので、表参道まで一直線である。大鳥居の前に立って参道の石段を見上げると壮大である、二百二段あるという石段は、急峻な石段というのではなくて、十分な空間を占有する壮重な感じの石段で、一段一段踏みしめながら登っていくのに、私のような者でも左程息が乱れるということもないのである。この塩釜神社は伊達家代々の藩主が心をこめて造営したものであるから、その心がこの石段にも反映しているのであろうが、この表参道の石段からして神社の格を示している。こうした石段から始まる神社の有様を芭蕉は「国主再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日朱の玉垣をかがかす。」と最大限の美辞麗句で描写するけれども、仙台市内の神社仏閣に見られた桃山文化的趣味に満ちた華麗な建築群に比すると、今少し神寂びた趣のある神殿群がここには群立している。海の側には一寸した自然の障壁があって直接に塩釜湾には面しない奥まった森の中に鎮座する神座であるが、唐門の右手にある塩釜桜も、左宮本殿前の忠衡奉納の文治燈籠も、神威を一層高め

る添景としてそこに存在する。判官びいきらしく源九郎義経の関連した伝誦の地では常に一筆ある芭蕉であるが、ここでも文治燈籠に注目する。和泉三郎忠衡の寄進であることが銘記されている鑄鉄製の燈籠であるが、忠衡が父秀衡の遺言に忠実に従い義経に殉じたことから「勇義忠孝の士」と讃仰しているのである。苔むした壺碑の文字に感涙したと同様の芭蕉の心がここに見られる、「義を守るべし」とは説くが、武人の未輩としての義に勇む心構えを説いているのではないであろう。文治燈籠の精巧な造型の中で、私どもは東北の地の鑄鉄技術の卓拔さをこそ見るべきである。藤原三代の早くから東北は未開の地ではなかったのである。

社務所前の美しい日本庭園を右手に眺めながら裏手の車道をJR塩釜駅に急ぐ、夕景が迫って足元がおぼつかない有様、朝日に輝く塩釜神社と夕闇迫るそれとは印象が異なるかなと思いつながら、そう言えば既往二度ばかりの塩釜神社参拝も全て夕景だったなと思うことである、塩釜に宿をとったことがないせいでもある。

東北本線と並行しているJR仙石線の塩釜駅から松島海岸駅へ向かう、今夜の宿泊は松島宿泊所仙松閣、駅前から裏手の山側の上まで遠そうと言うのでタクシーを探すけれどもなかなか見つからない。夜おそいのである、歩くのは疲れ切っていて閉口で、とにかく宿まで氣息奄奄とたどり

着く。松島の夜景、夜の松島を楽しむ余裕なく、疲れを休めること専一である。